



かみ はま ゆみ

# 上濱弓2号墳

## 上濱弓遺跡

1982

松江市教育委員会

## 凡　例

1. 本書は、松江市教育委員会が原不動産代表者原美都子氏からの依頼を受け、昭和56年度において実施した上浜弓第2号墳及び上浜弓遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

委託者 松江市西川津町1078番地  
原不動産 代表者 原 美都子

受注者 松江市末次町86番地  
松江市長 中村 芳二郎

主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 栄

事務局 松江市教育委員会 社会教育課

秘括 同上 社会教育課長 石飛 進

庶務会計 同上 文化係長 中西 宏次  
同上 文化係主事 加藤 駿

担当者 同上 文化係主事 岡崎雄二郎  
同上 文化係主事 中尾 秀信

補助員 同上 文化係指導員 佐々木稔

3. 作業にあたっては、下記の方々の協力を得た。 (敬称略)  
加藤 博己 原不動産
4. 本書の編集は、主として岡崎が担当した。
5. 遺物の実測は、佐々木と加藤が担当した。
6. 図面の整書は、中尾が担当した。
7. 上浜弓遺跡の出土品については県立博物館学芸員森口市三郎氏から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

## 目 次

I 調査にいたるいきさつ .....	1
II 位置と歴史的環境 .....	1
III 上濱弓2号墳 .....	5
1. 調査の概要 .....	7
2. 小 結 .....	12
IV 上濱弓遺跡 .....	17
1. 第1号土壙 .....	19
2. 第2号土壙 .....	24
3. 第3号土壙 .....	31
4. 第4号土壙 .....	32
5. 遺跡の検討 .....	32
6. ま と め .....	34

## I. 調査にいたるいきさつ

本古墳を含む周辺丘陵一帯の古墳の分布が知られたのは、昭和42年において島根大学考古学研究会が踏査した結果による。<sup>注1</sup>

菅田、川津地区における最近の人口増加は著しいものがあり、宅地造成、水田地を中心として急速に進行している。原不動産では、菅田町地内の丘陵において、宅地造成事業を計画し、松江市教育委員会に埋蔵文化財の有無について協議があった。昭和55年の11月4日に現地立会し、本古墳が計画地内に含まれることが判明した。

教育委員会としては、事前に発掘調査を実施して価値を判断することが必要であると考えた。そこで昭和55年度において、受託事業として発掘調査を実施した。

調査は、昭和56年5月11日から同年6月3日までの計21日間を要して行なわれた。

## II. 位置と歴史的環境

本古墳は、松江市の中心市街地の東北のはずれにあたって、島根大学裏の低丘陵上に立地する。その所在地名は松江市菅田町字上浜弓570番地である。



第1図 遺跡の位置

本古墳は上浜弓古墳群に含まれ他の7基の古墳は同じ丘陵上に散在する。規模も最大一辺16m、高さ3mと比較的小規模のものが多い。

しかし、この丘陵の南端には、葉山古墳や菅田丘古墳のような古墳時代中期頃の特筆すべき古墳がある。すなわち、葉山古墳は規模や

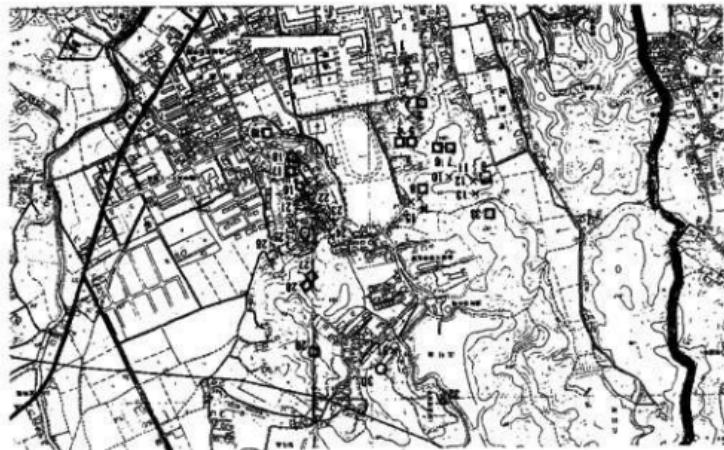
墳形は不明であるが、主体部は箱式石棺と思われ、出土品の中には、山陰地方でも最古形式の須恵器を副葬していた。  
注2

又、菅田丘古墳は前方後方墳で、主体部は一種の裸郭である。

さらに、島根大学東側に隣接する低丘陵突端には、国の史跡に指定されている金崎古墳群がある。当古墳群は昭和18年山本清氏によって発見された。当初は、前方後方墳2基、方墳9基から成る古墳群で昭和32年7月27日付けで国の史跡に指定された。

しかし、昭和38年、住宅団地造成工事に伴い、この内方墳6基が未調査もしくは調査中途で破壊された。結局、残る5基の古墳は松江市に寄附採納され保存整備工事が行なわれた。第1号墳は全長32mの前方後方墳で、後方部に竪穴式石室があり、山陰地方では最古の須恵器類が副葬されていた。編年の上では山陰I型式とされている。  
注4

又、先年調査をされた、タテチョウ遺跡では、縄文時代から弥生時代を経て、古墳時代中世に至るまでの土器類が出土しており、現在の橋本付近から朝酌川上流の持田地区へ至るまでの低地において、早くも縄文時代から人が住みつき、狩猟、漁撈、弥生時代においては、農耕を営みながら生きながらえてきたことが分る。  
注5



第2図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

地図番号	名 称	墳 形	規 模	内 部 主 体	出 土 品
1	薬師山古墳 (注2)	不 明	不 明	箱式石棺か?	彷彿四乳鏡、刀身、鐵錐、有孔円板、土師器、須恵器
2	菅田丘古墳 (注3)	前方後方墳	中軸長30m	1.2×2.5mの礫床	水晶及びガラスの玉類
3	小丸山古墳 (注4)	方 墳	一辺 25m 高さ 3 m	未 調 査	円筒埴輪
4	宮田1号墳	"	一辺 14m 高さ 2.5 m	"	
5	" 2号墳	"	一辺 6 m 高さ 1 m	"	
6	浜弓1号墳	"	一辺 7.5 × 6 m 高さ 2.8 ~ 1.5m	"	
7	" 2号墳	"	一辺 6 × 6.5 m 高さ 1 × 0.5 m	"	
8	上浜弓1号墳	"	一辺 16m 高さ 3 m	"	
9	" 2号墳	"	一辺 12 m 高さ 1 m	"	
10	" 3号墳	不 明	直径又は一辺が 7 ~ 9 m	"	盛土かなり流出
11	" 4号墳	"	"	"	"
12	" 5号墳	"	"	"	"
13	" 6号墳	"	直径又は一辺が 10m、高さ 1.4 m	"	"
14	" 7号墳	"	直径又は一辺が 4.5m、高さ 1 m	"	"
15	" 8号墳	"	不 明	"	崖表土から須恵器蓋坏の坏身部の小片(山陰1期)
16	金崎1号墳	前方後方墳	中軸長 32 m	後方部に堅穴式 石室	須恵器(山陰1期)、鏡、 鐵器、ガラス玉類多数
17	" 2号墳	方 墳	一辺 10m 高さ 1 m	未 調 査	盛土かなり流出
18	" 3号墳	"	一辺 20m 高さ 2 m	"	
19	" 4号墳	"	一辺 26.5 × 17 m 高さ 3 m	"	
20	" 5号墳	前方後方墳	主軸長 22 m	"	円筒埴輪片、須恵器有蓋 杯片
21	" 6号墳	方 墳	一辺 20m 高さ 1.5~2m	礫床を有する木 棺	遺物なし 昭和38年調査中に破壊

地図 番号	名 称	墳 形	規 横	内 部 主 体	出 土 品
22	金崎 7号墳	方 墳	一辺12×7.5m 高さ 2.5m	不 明	遺物なし
23	" 8号墳	"	一辺9.4×7m 高さ 1.5m	長 2.6m 幅 0.22×0.3m 土 墳	
24	" 9号墳	"	一辺14×11m 高さ 1.5m	不 明	盛土中から須恵器蓋坏3合、 鏡1、鐵錐1束
25	" 10号墳	"	一辺11~12m 高さ 2 m	"	遺物なし
26	" 11号墳	"	一辺 9 m 高さ 2 m	土 墳	墳丘西北側の地山面から繩 文晩期の甕出土
27	福山 1号墳	"	一辺 17 m 高さ 2.5 m	未 調 査	
28	" 2号墳	"	一辺 15 m 高さ 2.5 m	"	
29	" 3号墳	"	一辺 15 m 高さ 2.5 m	"	
30	深町 1号墳	円 墳	直径 20 m 高さ 2 m	"	西側墳裾から古式土師片と 円筒埴輪片採集
31	" 2号墳	円 墳 状	不 明	"	原形を損する
32	深町 横穴	横 穴	玄室 2.2×2.5m	760707 調 査	須恵器(広口壺、坏蓋)、 大甕片、人骨片

III 上濱弓2号墳

## 1. 調査の概要

### 墳丘の構造

測量したところ東西辺14.5m、南北辺の残存長8m、高さは東部で1.3m、西部で1.8mを計る中規模程度の方墳であった。墳丘の南半分近くは、既に掘削され高い崖面となっており、西部及び北部も墳裾近くまで今回の工事で削り取られていた。

調査の結果、墳丘の規模は測量時の数字とさほど隔たりはなかった。高さは、東部裾から1.45m、東西辺は西部が調査中、降雨により崩壊したので計測不可能となったが、墳丘中心部から東側の墳裾までは6.4m、上端は同じく3.5mを計る。

墳丘は、まず尾根の東西を深さ1mほど削り取り、内側に旧表土をそのまま残した方形台状の墳丘基盤を形成した後、盛土を30cm余り施したものである。盛土は、旧表土直上から白粘土ブロック混じりの明褐色土、次に褐色土、次に表土をなす暗褐色土の順に盛られている。

旧表土は、黒色～暗赤褐色粘性土で墳央部においておよそ5m四方の範囲に遺存していた。墳裾外方に溝らしきものは穿たれていない。

### 遺構

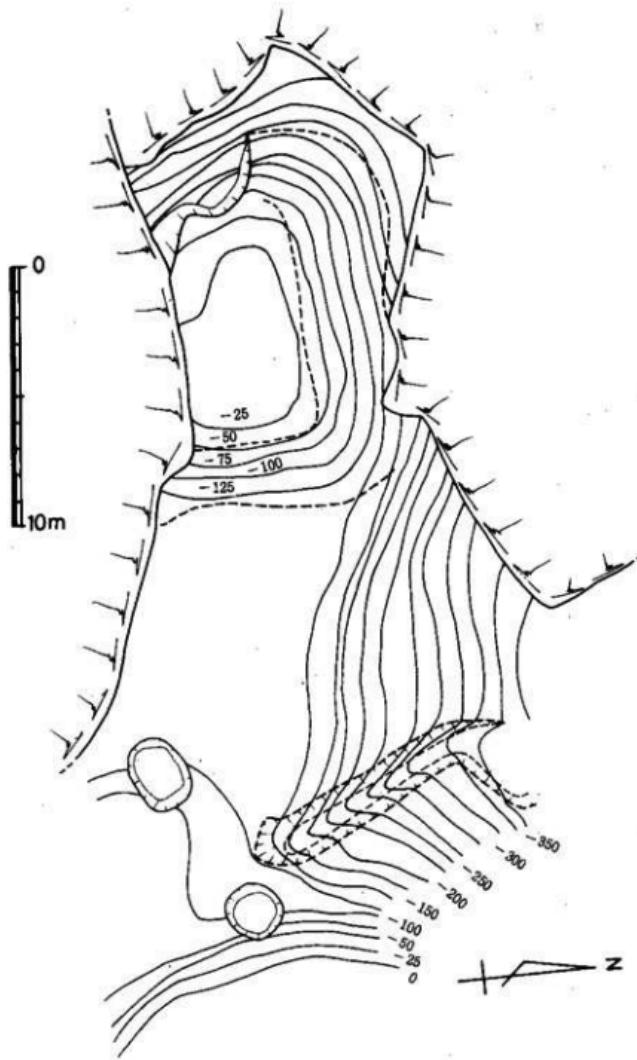
墳央部の旧表土は、一様に変化なく分布しており、盛土層も何ら変化がなかったので、盛土及び地山面においても墓壙など主体部と思われる施設は確認されなかった。

しかし、墳丘の西南部崖際で長さ3m、幅1m、深さ30cmにわたって、凹地が認められ、調査したところ表土直下において、計7個の扁平な石が集中して検出された。この石は、灰白色の大海崎石で、大きいもので、さしわたし22cm、幅12cm、厚み6cmほどを計る。付近からは、土師器の細片も多く発見された。

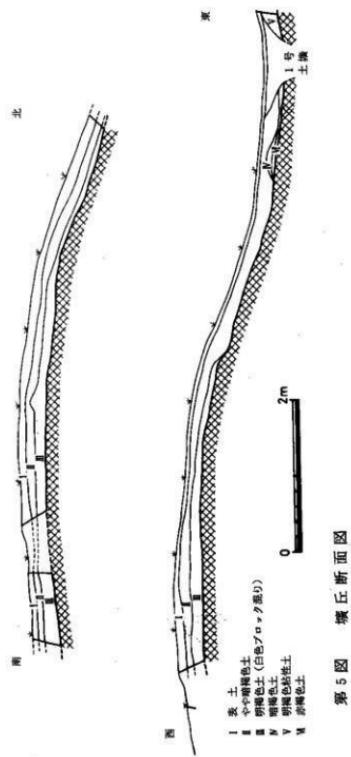
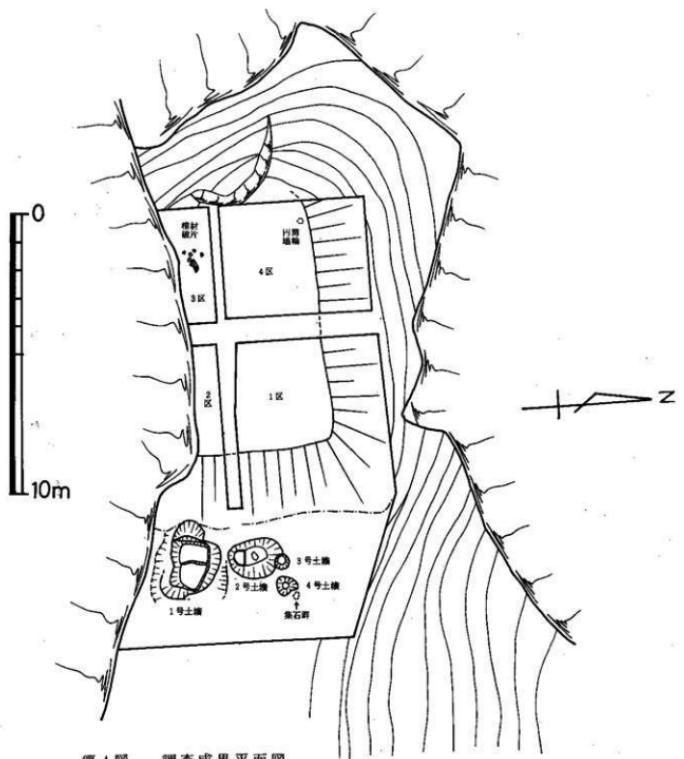
調査中途で、この部分は崩壊しつつあったので、調査不能となり、どのような施設があったのか不明というしかないが、略長方形の凹地が認められることと、扁平な大海崎石が集中して検出されたことから、ここに組み合わせ石棺を置く埋葬施設があり、後世盗掘を受けたのではないかと思われる。

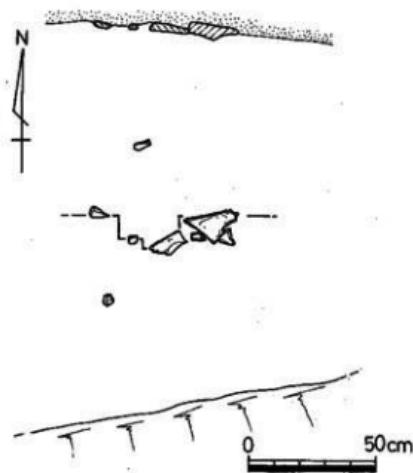
### 遺物

円筒埴輪 墳丘上部平坦地の北西隅から出た。埴輪土は、表層が7cmあり、その下部は、黄褐色粘性土の地山となっている。埴輪はその地山面を4cmほど掘り込み底部を埋めている。底端部から高さ7cmほどの部分しか遺存しておらず、突巻の部分や全体の器



第3図 調査前測量平面図





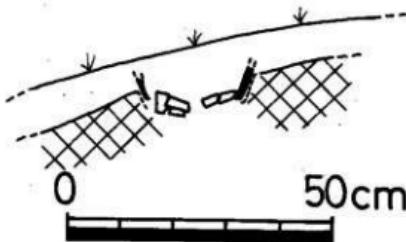
第6図 石棺材検出状況

墳の場合設けられた位置は、上部平坦地の端にあたり、他にあまり例のないことが注意される。

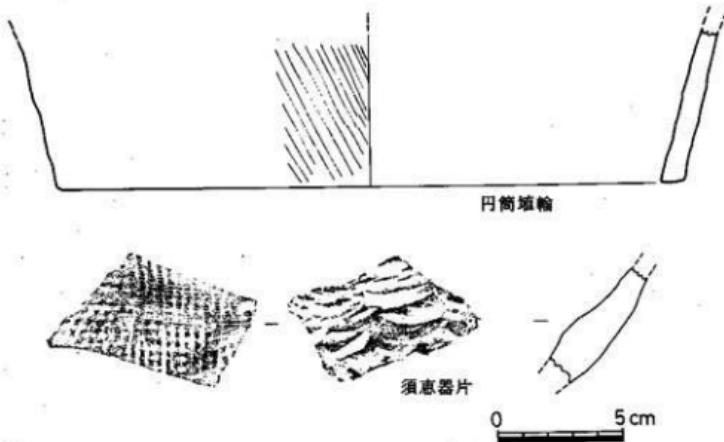
設置地点の分かるものは、図に示した以外ではなく全て小片である。その分布範囲は、図に示した円筒埴輪の検出位置を北限として、南は先述の扁平な石を検出した畠地付近までである。大体、長さ4.5m、幅1mの範囲において認められ、中心畦から東側の部分にお

形についてはよく分らないが、底径は25cmほどになり底端部での厚みは0.8cmと通常のものに比してややうすい。全体に淡黄色を呈し、焼成は、あまりよくな。表面は、針方向の刷毛目調整を施し、裏面は、剥落して原状はよく分らない。

通常、円筒埴輪は、古墳の墳頂に並べ置かれるものであるが、本



第7図 円筒埴輪出土状況



第8図 2号墳出土品実測図

いては、1片も発見されなかった。

**須恵器窓** 形土器の底部付近の破片で、墳丘北東部の上部平坦地から出土。その層位は、地山である黄褐色粘性土上面である。

破片は、一方の端の厚み $0.8\text{ cm}$ 、反対側の端の厚み $1.2\text{ cm}$ と厚みに変化のある部分である。表面は、平行叩き目を遺存し叩き調整の後、水平方向のカキ目調整を施している。裏面は深い同心円叩き文が遺存し、その後ナデ調整を施している。本古墳との関係は不明である。

## 2. 小 結

本古墳は、推測するところ一辺 $14.5\text{ m}$ 、高さは $1.45\text{ m}$ を計り、墳丘基盤は、東西の地山を深く削り取ることによって、相対的に墳丘を造り出し、その上にさらに $30\text{ cm}$ ほどの盛土を施すものである。

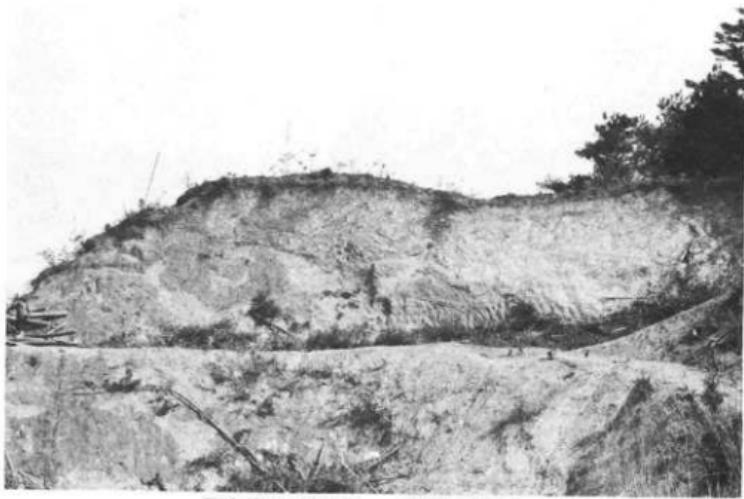
埋葬施設は確認出来なかったが、組み合わせ石棺の可能性が強い。

外表施設としては、墳丘上部平坦面の外郭に円筒埴輪を設けていたことが分かった。

以上のことから、本古墳は古墳時代の後期頃に築成されたものであり、当地区では中規模の大きさを有した古墳であることが推測される。



調査前の古墳遠景　—西からみる—



調査前の古墳近景　—南側からみる—



調査前の古墳近景 一東からみる一



調査後の古墳遠景 一北からみる一



2号墳墳丘基盤



2号墳墳丘基盤



円筒埴輪出土状況

上 濱 弓 遺 跡

## 調査の概要

上浜弓第2号墳の周溝の有無について、墳裾東側の平坦地を調査したところ、肝心の周溝は無かったが、土壙が4ヶ所隣接して検出されたので、これを上浜弓遺跡と名づけて調査区を東へ拡張し周辺一帯を調査した。

### 1. 第1号土壙

遺構 東西辺18.5m、南北辺1.4mの略長方形の土壙で底は二段となっている。東側の底面がより浅く上端から60cm～70cmの深さを計る。78cm×74cmの略正方形を呈し、ほぼ水平を保つ。そして、落差16.4cmの段があつて西側により深い底面がある。底面は、108cm×70cmの略長方形で、ほぼ水平を保つ。

この土壙は、表土直下の褐色～明褐色粘性土を堀り込んでおり実際には、堀り方の上端の径は2.7mほどになるものと思われる。

土壙内部の堆積土は、大半が白色や黄色の地山ブロック混じりの軟らかい明褐色土～黄褐色土で短時間に埋められたもので、特に土を踏みしめた形跡はない。層厚は7.5cmほどである。この土層の上に明褐色土が7cmほど堆積している。

#### 遺物

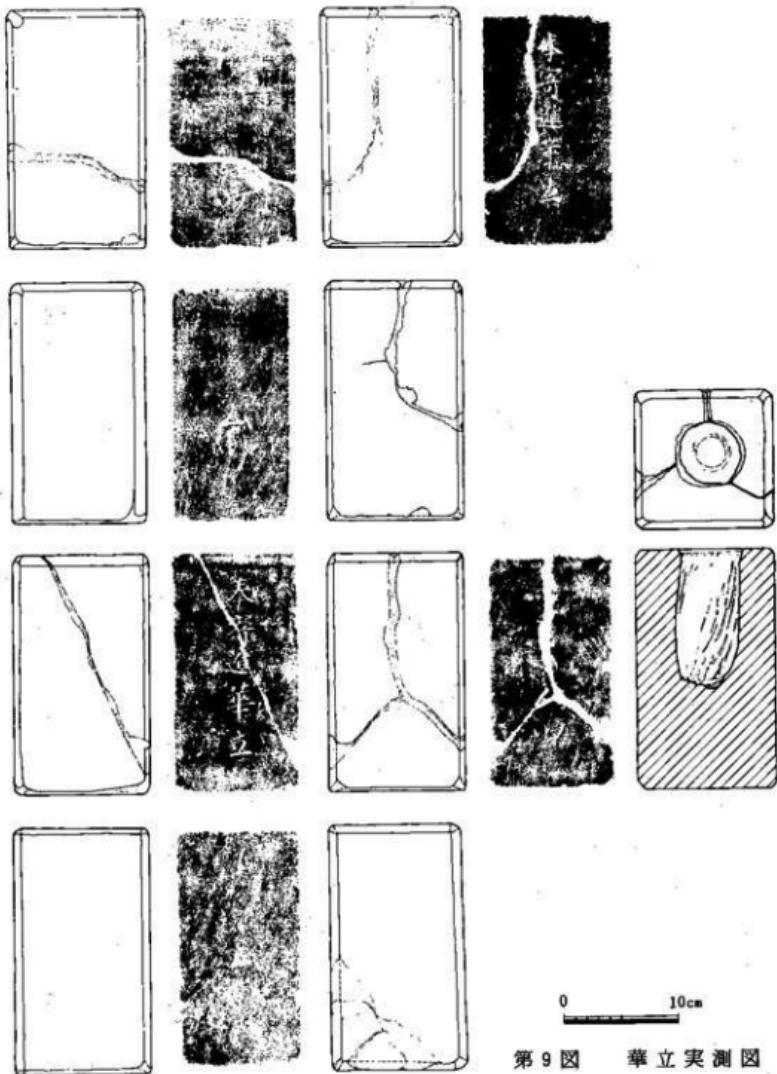
華立 土壙内堆積土中から出土。堆積土上面から40～70cmほど下位においてほぼ同じ深さに4基分の華立が散在していた。華立は、来待石（軟砂岩）製で全て破壊された状態であった。寸法は、4基ともに同等で高さ21cm、一边の幅12cm、角部分を0.8cmほど面取りしている。上面、側面共に表面はきれいに研磨されているが底面は研磨せずノミ痕を遺存する。上部中央に直径5.8cm、深さ1.2cmほどの円孔を穿つ。内面は、未調整でノミ痕を残す。

側面の一面には、中央に篆書きで「奉寄進華立」と彫り刻まれ、字句の部分のみ赤色顔料で塗彩している。又、その左側面の中央下半部には、篆書きで「ムツ」と彫り込まれ、やはり字句の部分のみ赤色顔料で塗彩されている。

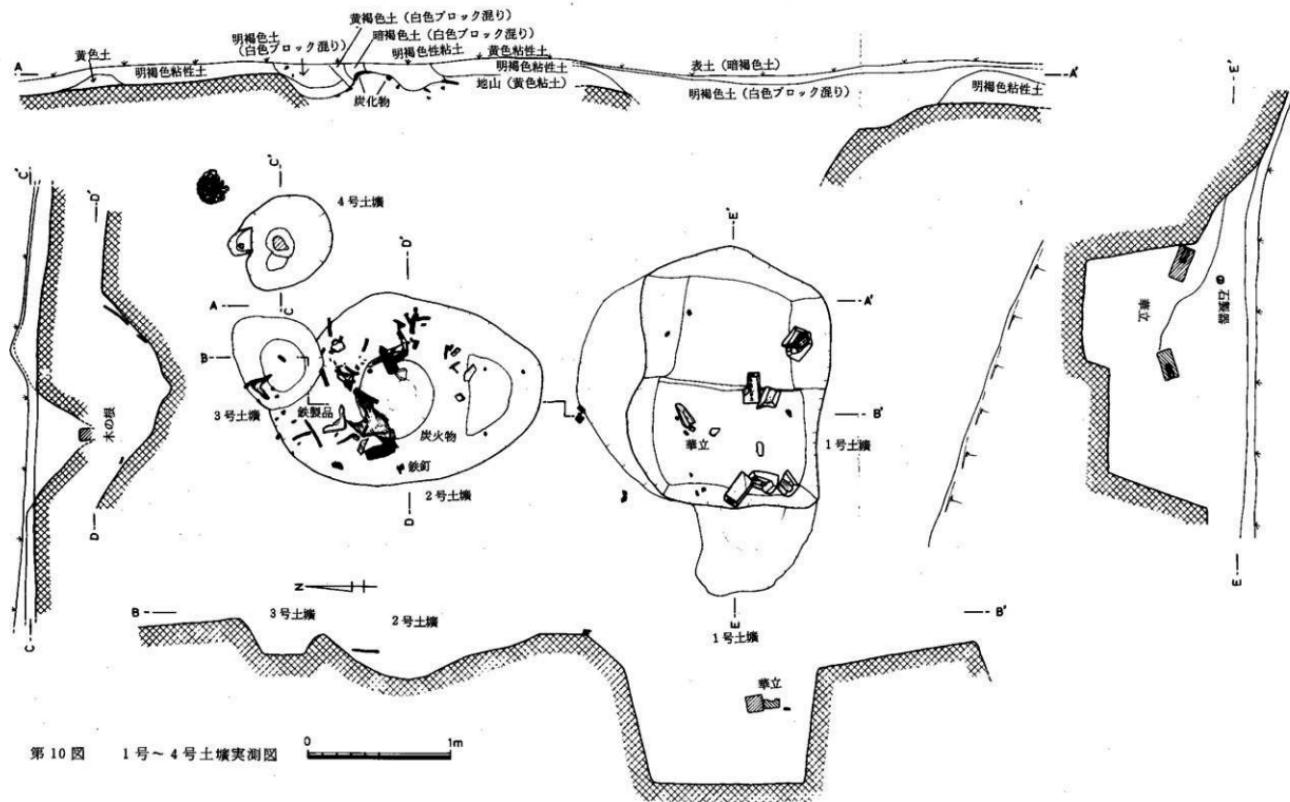
石製品 略載頭円錐形を呈するもので来待石を加工。上円径4.9cm、下円径6.1cm、高さ4.2cmを計る。恐らく、ろうそく立てに使用されたものと考えられる。

鉄製品は、後述する2号土壙内でも同種のものが多量に出土しているので2号土壙出土品によりA類からG類まで区分したが、1号土壙では、その内A、C、D、E類の4種類と鉄釘が出土している。以下、順を追って説明する。

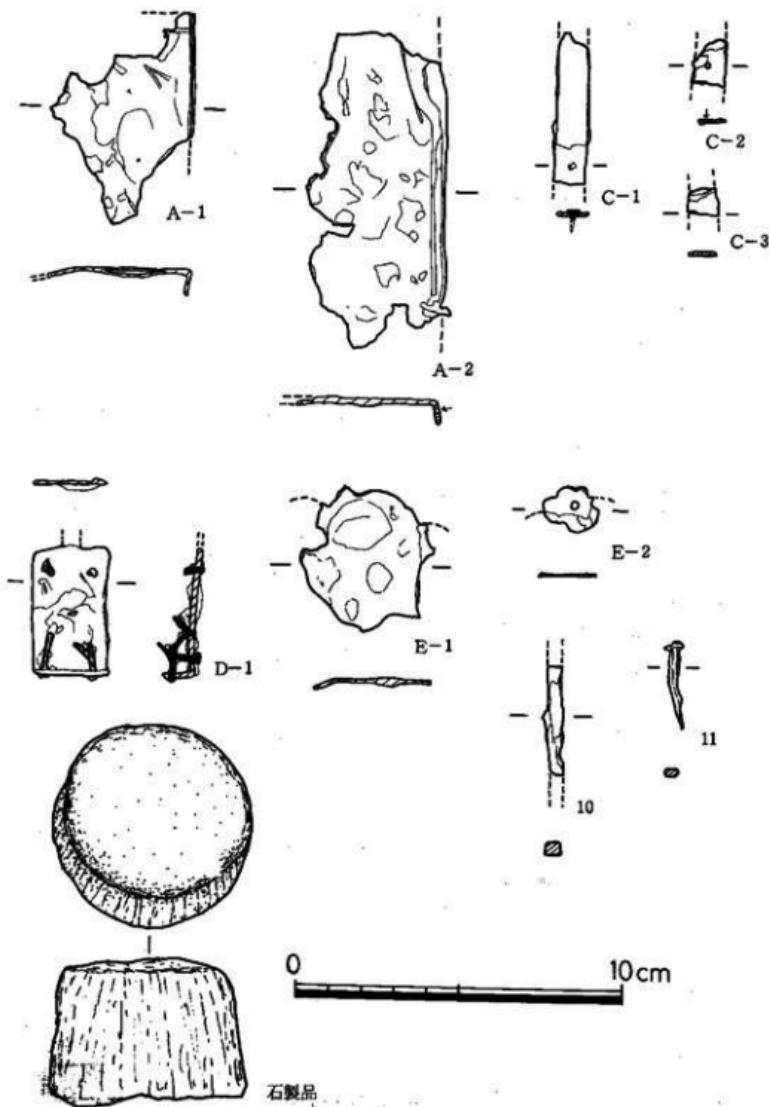
A類 1. 鉄板の片側を8ミリほど直角に折り曲げたもので、角部に2面からそれぞ



第9図 華立実測図



第10図 1号～4号土壤実測図



第11図 1号土壤出土品実測図

れ鉄釘が2本交差して打ち込んである。鉄板の厚みは0.8cm、鉄釘の長さは0.9cm、直径1ミリを計る。(第11図 A-1)

2. 鉄板の片側を7ミリほど直角に折り曲げたもので厚みは1ミリを計る。

(第11図 A-2)

- C類 1. 横幅1cmの狭幅の鉄板で中央部に鉄釘が打ち込んである。厚み1ミリ。  
(第11図 C-1)

2. 横幅1cm、厚み0.8ミリを計り中央部に鉄釘穴がうたれています。  
(第11図 C-2)

3. 横幅0.9cm、厚み1ミリを計る。(第11図 C-3)

- D類 1. 3.8×2.3cm、厚み1ミリの長方形鉄板に幅5.5ミリの柄をつけるものであるが、柄の部分は欠失している。長方形鉄板には中央部に1か所、両側に各2か所ずつの鉄釘が打ち込まれている。短辺の片側は高さ7ミリほど直角に折れ曲がりその部分にも2本の釘が打ち込まれている。  
(第11図 D-1)

- E類 1. 外縁の大半を欠失しているが、輪花状になるもので鉄釘が1本打ち込まれている。厚み1ミリ。(第11図 E-1)

2. 小型のもので弁が3弁遺存する。厚み0.5ミリ。(第11図 E-2)

- 鉄釘 1. 現存長3.3cm、一辺4×5ミリの角釘の破片である。  
(第11図 10)

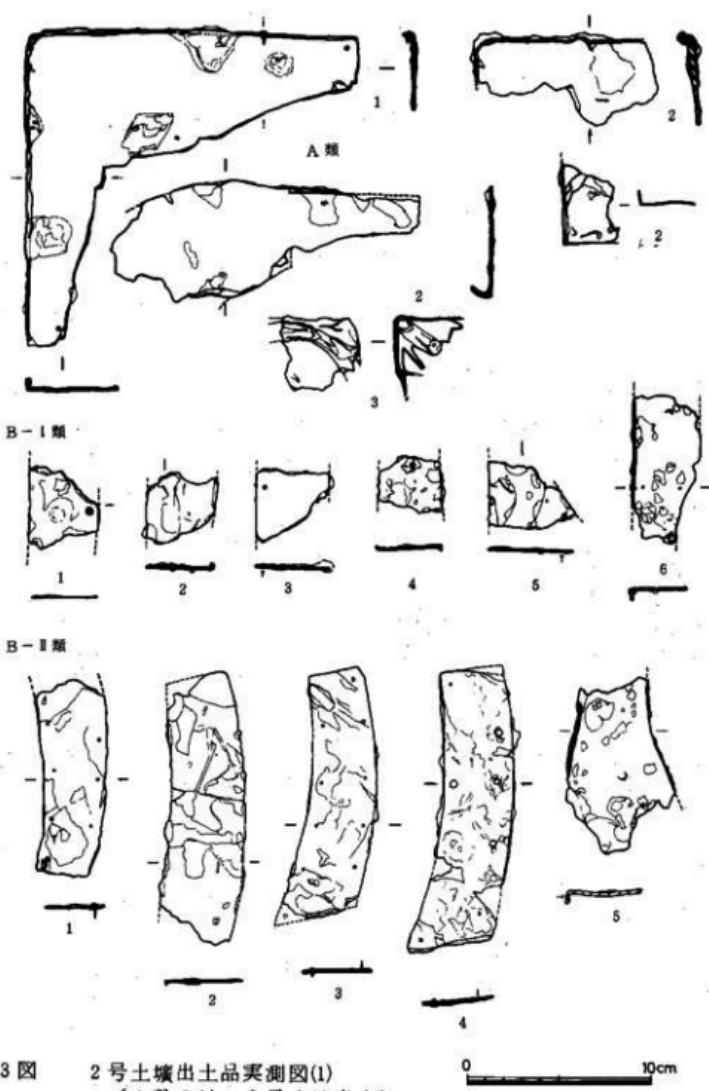
2. 長2.7cm、一辺4×2.5ミリの角釘の完形品である。  
(第11図 11)

土師質土器 土壙の直上で埋土の上部から出土。底径6cm。底部の厚み5ミリを計り、底外面は、糸による切り離しを行っている。(第11図 12)

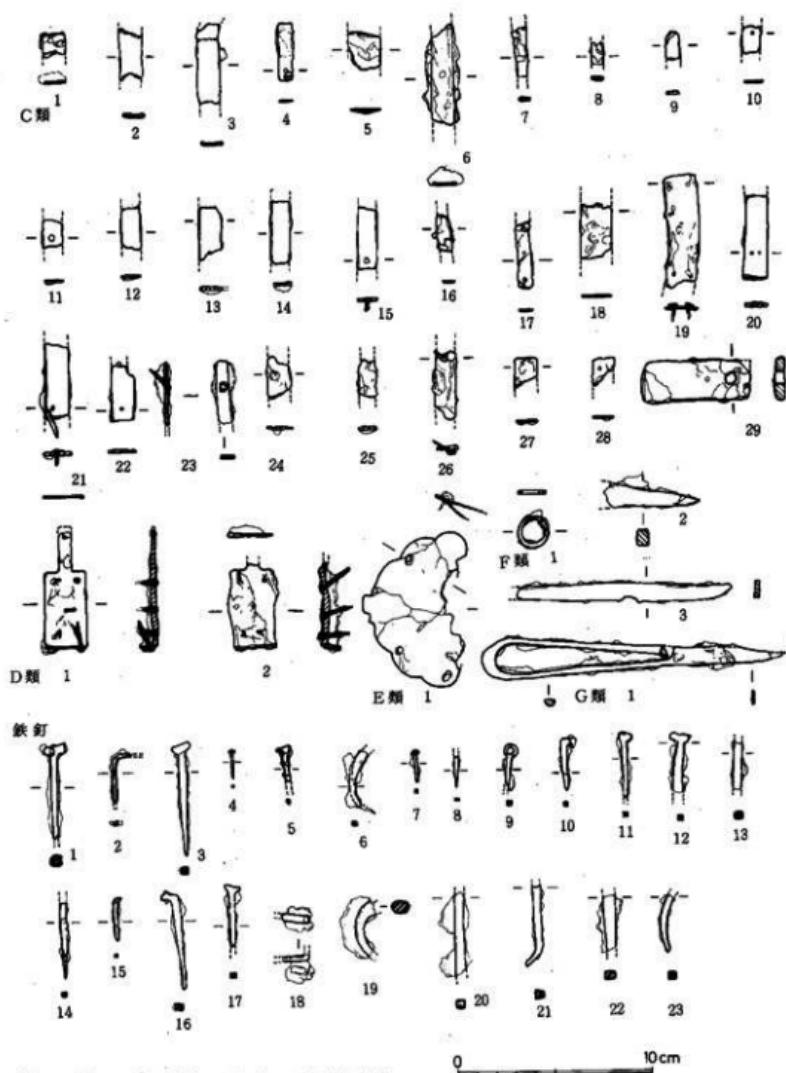
## 2. 第2号土壙

遺構 平面形は地山面上端において南北長19.2cm、東西長13.7cmほどの梢円形を呈する。断面は、すり鉢状で底部中央においてわずかに、15cm×24cmほどの平坦面が認められる。

内部の堆積土は、地山の白色、黄色の小ブロックを含む明褐色の砂質土で、その上は表土となっている。土壙壁面近くは、炭化物混じりの褐色砂質土がうすく堆積している。



第 13 図 2 号土壤出土品実測図(1)  
(A類 2 は、3号土壤出土)



第 14 図 2号土壤出土品実測図(2)

## 遺 物

壙内の出土品は、その殆んどが鉄製金具類で、他に鉄釘と多量の木炭及び細竹の炭化状のものが検出された。又、土壙上面からは「寛永通宝」が6枚鈎化し、じゅずつなぎとなって発見された。以下、順を追って説明する。

A類 1 平面形は外郭の線が角部で1センチの区間カーブしながら直角を成し、さらにその両端は、1.5～2.4センチ直角に折れ、角部で2×5ミリほどのくり込みを有し内側の線へと続く。

内部の線は、中央部に向かうにつれ、幅を大きくし、中央部において計4か所、三角状ないしは直角状のえぐりを有する。鉄板の厚みは、1.5～2.0ミリを計る。

3か所に直径1.5ミリの円孔をうがつ。外縁の部分は、そこから直角に高さ8ミリほど垂直に延びており、1か所に小さな鉄釘（直径1ミリ、現存長5ミリ）が貫通している。（第13図 A-1）

2 3面それぞれ直角をなす部分で、内側に直径8ミリほどの環と、うすい鉄板状のものがまわり、外側から細い釘（直径1ミリ、現存長1センチ）が貫通している。（第13図 A-3）

B類 幅の一定した直線型のもの（B-1）とカーブするもの（B-II）の2種類に小区分される。

B-I類 1. 幅3.7センチ、厚み0.8ミリで釘穴を1か所有する。（第13図 B-I-1）

2. 幅3.8センチで、一方の側にかえりを有する。厚み0.8ミリ。

（第13図 B-I-2）

3. 幅4.0センチで、一方の側に直径1.5ミリの円孔を有する。厚み0.8ミリ。

（第13図 B-I-3）

4. 幅3.4～3.6センチ、厚み0.8ミリを計り、やや幅に変化がある。

（第13図 B-I-4）

5. 三角状になるもので、厚み0.8ミリ、直径2ミリの円孔あり。

（第13図 B-I-5）

6. 幅3.7センチ、厚み1ミリを計る。直径1.5ミリの円孔を2か所有する。

一方の側に高さ6.5ミリほど直角に折り曲げられている。その面には、内側に向かって小さい鉄釘が貫通している。（第13図 B-I-6）

- B-II類
- 幅3.0～3.8センチ、厚み1ミリを測る。両端部に計7か所の円孔を有し、その内1か所は、鉄釘が貫通している。2.2～2.65センチの心々距離を有する。（第13図 B-II-1）
  - 端部は、3.2センチの幅を有し、欠失部分で4.1センチとなる。厚み1ミリを計る。（第13図 B-II-2）
  - 端部3.4センチの幅を有し、反対側は、幅4.8センチで、直角に折れ曲がっている。両側に6か所の鉄釘もしくは、釘穴を有するが、復元すると12か所あると思われる。（第13図 B-II-3）
  - 端部は、幅3.0センチ、反対側は、幅4.6センチで直角に折れ曲がる。両側に8か所の釘穴を有するが、復元すると12か所となろう。心々距離は、2～3.1センチを測る。（第13図 B-II-4）
  - 横幅3.8～5.4センチと一方の外縁がカーブする。他方の端は、7ミリほど直角に折れており、1か所直径1.5ミリほどの釘穴を有する。厚みはおよそ1ミリを計る。（第13図 B-II-5）

C類 比較的幅の狭くて厚みのない鉄板で、最小のもので0.55センチ、最大のもので1.6センチを測る。以下数量が多いので、一覧表にかかげる。

	横幅(cm)	厚み(mm)	釘穴(mm)	直径(cm)	釘(本)	他
1	1.2	2	—	—	—	端部
2	1.2	2	—	—	—	
3	1.2	1	—	—	—	
4	0.7	0.8	1	2	—	端部
5	1.65	1	—	—	—	
6	1.1	1	—	—	—	
7	0.5～0.75	1	—	—	—	
8	0.6	1	—	—	—	
9	0.7	1	—	—	—	
10	1.0	1	1	1.5	—	
11	1.0	1	1	3	—	
12	0.95	1	—	—	—	
13	1.25以上	1	1	1	—	

14	1.0	1	-	-	-		
15	1.0	1.5	1	不明	-	端 部	
16	0.65	1.0	-	-	-		
17	0.7	1.0	1	1.5	-		
18	1.6	1.0	1	1.5	-		
19	1.65	1.0	4	1.5	2		
20	1.2	1.5	2	1.5	-	端部あり	
21	1.2	2.0	1	不詳	1		
22	1.15	1.5	1	1.5	-	端 部	
23	0.6~0.65	1.5	1	-	1		
24	1.55	1.0	-	-	-		
25	0.7~0.85	1.0	-	-	-		
26	1.0	1.5	-	-	-		
27	1.2	1.0	-	-	-	端 部	
28	1.1	0.5	1	1.5	-		
29	2.0	5.0	1	6.0	-	最大5cmの 発形品	

D 類 長方形鉄板の一方の短辺に細長い柄のつるもので、2個体ある。

1. 長方形鉄板は、 $2.15 \times 4$ センチ、厚み1.5ミリを計る。柄の反対側の短辺は、7ミリほど直角に折れ曲がる。鉄板には、中央に1か所、両側に2か所づつの釘穴があり、いずれも釘が遺存していた。釘の長さは、1.5センチを計る。柄は、幅0.65センチ、長さ2.3センチを計り、端部近くに直径1.5ミリの釘穴を有する。（第14図 D-1）
2. 1と同じ大きさのもので、柄状部分を欠失する。（第14図 D-2）

E 類 輪花模様の金具で、出土品中で唯一の装飾を有するものである。

- 輪花は、6弁を数えるが、円状に並ばず、むしろ三日月状のものになろう。  
5か所に釘を有する。さしわたし8.1センチ、厚み1ミリを計る。

（第14図 E-1）

F 類 リング状のもので、直径2ミリ近くの細い棒を折り曲げたもの。リングの直径は、外径で1.6~1.7センチを計る。（第14図 F-1）

G 類 和バサミである。

1. 長さ1.5センチ、茎のつまみのさしわたし2.2センチ。断面はカマボコ型で、厚み3ミリ、幅5ミリを計る。刃部は、長さ2.7センチ、先端部を欠失するが、鋭く尖るものであろう。（第14図 G-1）
2. 刃部のみの破片である。現存長4.9センチ、先端が鋭く尖るもの。厚み3ミリを計る。（第14図 G-2）
3. 現存長1.10センチ、中央部に長さ7ミリ、奥行き2ミリほどのえぐりがあり、その附近に、釘穴が1か所ある。和バサミ様の形状を呈する。（第14図 G-3）

鉄釘 計23本あり。数量が多いので、以下一覧表に掲げる。

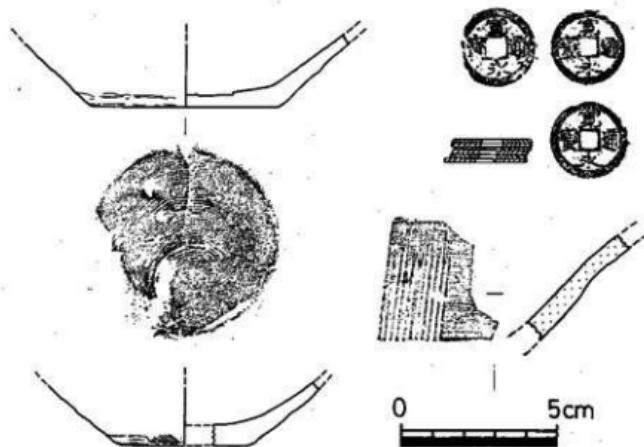
番号	長さ cm	現存長 cm	厚み	備考
1		4.8 ~	5.0×5.0	
2		2.5 ~	2.0×6.5	舟くぎか？
3	5.8		3.0×4.0	
4	1.5		1.0×1.0	4 mmの円とかさ型の頭あり
5		1.7 ~	2.0×1.5	
6		2.9 ~	6.0×6.0	カーブ強い
7	1.7		1.5×2.0	
8		1.1 ~	2.0×1.0	
9		2.2 ~	2.5×2.5	さしわたし7 mmのリングの頭あり
10	2.6		2.0×2.5	
11		3.4 ~	2.5×2.5	
12		3.0	3.0×3.0	
13		2.4	4.5×3.5	
14		3.8	3.0×2.0	
15	2.2		1.5×1.5	
16	4.9			
17		3.1	3.0×3.0	
18		1.4	3.0×2.0	
19		2.9	6.0×9.0	側面だ円形
20		4.3	4.0×4.0	
21		4.2	5.0×3.0	
22		2.9	5.5×3.0	
23		2.8	4.5×4.0	

**古銭** 「寛永通宝」が6枚連なった状態で発見された。出土地点は、土壤のやや南部よりで表土の真下である。直径2.5センチ、方形透しの一辺は0.5センチ、厚み1ミリを計る。

所謂「六道銭」と思われる。

**炭** 径1センチから5センチほどの雑木が完全に炭化した状態ではほぼ土壤内の全域から出土した。壁面近くでは、壁の傾斜にはほぼ沿っている。

**すり鉢** 表土層から出土。体部の破片で11本以上の沈線を付ける。江戸期備前焼系統のものであろう。



第15図 上横弓遺跡出土品

### 3 第3号土壤

第2号土壤の北側の上端部によって、南部の壁が削り取られているが、南北径6.4センチ、東西径6.6センチ、深さ4.0センチほどの不正円形の土壤で、壇底は $0.3 \times 0.4\text{ m}$ ほどの円形の平坦面を形成する。内部の堆積土は、黄色と白色の地山小ブロック混りの明褐色土が充満しており、中途に炭が発見された。

## 遺物

- 鉄製品 1. 土壙北西寄りの比較的上位の壙中に、ほぼ直角に折れ曲がった止め金具が1点出土した。それ以外に壙底付近から何も出土しなかった。
2. 1と同様の平面形となるものであるが、3片に分かれる。釘は、やや端に寄つたほうに1か所と端部に2か所貫通しており、さらに外縁から直角にのびた鉄板にも1か所釘が貫通している。(第14図 A-2-3)

## 4 第4号土壙

第3号土壙の東側に、ほぼ上端を接して掘り込まれている。

さしわたり、60~70センチ、深さ40センチ以上を計る。土壙は急角度で内側に傾斜し中心に直径13センチの木の根を遺存する。土壙北部上端付近にも、直径5センチほどの木の根が遺存し、その部分の周囲がさしわたり16センチにわたって凹んでいた。

小さい方の根の凹地は、自然のものと判断されるが、大きい方の根の周囲は、根の穴にしてはあまりにも広すぎるし整っているので、これは当初土壙が掘り回されており、その後、壙底付近に木の根が入り込んだものと考えた方がよい。

来待石小甕 この第4号土壙の東北方へ25cm離れて地山面上において、さしわたり20cmほどの狭い範囲に4~5cmの小甕となった来待石が集中している。

個々の石は、加工した形跡もなく又、もと1つの大きな石であった確証も得られなかった。

### その他 土師質土器

土壙群から5m北方の斜面表土中から出土。底径4cm。底部の厚み7mmを計り、底面は糸切り後、粘土を貼りつけている。

## 5. 遺跡の検討

### 第1号土壙について

第1号土壙は、その深さといい平面形態といい現在と変わらない土葬用の墓壙ではないかと考えたが、壙底付近からは、人骨や副葬品の類もなく、その確証は得られなかった。

内部堆積土中で発見された華立は「ムツ」という人が寄進した華立であることは分かる。だが、一体何時頃に対して寄進したのかはよく分からない。ただ、この種の小型の華立は一般

の墓地に供したものではなく、地蔵さんとか野仏に献じたものであろうといわれる。本遺跡所在丘陵尾根の先端部中腹に野仏が、宝鏡印塔や五輪塔の一部と共に地元で丁重に祀られている。特に野仏は地元民の間では「こく地蔵」と呼ばれ地元で篤い信仰がある。従って、この仏に關係した草立であった可能性が強い。

この草立の影字の部分が赤色塗彩されていることについては、民俗例にそうした風習もなく、全く解釈出来ない。

#### 第2号土壙について

土壙内出土の鉄製品の多くは、直角に曲げたものや、長方形の鉄板状のものがあり、いずれも釘もしくは釘穴がついていることから、収納箱のようなものの取付金具ではないかと思われる。三角状の金具は隅金具と考えられる。鉄釘はこの箱を組み立てる際に打ち込まれたものである。又、輪花装飾状の金具も見受けられ、金具類が豊富であることから箱の原体は、よほど大きなものであったか、もしくは、金具をたくさん取り付けたしっかりしたもので、貴重品を収納していたのか、そのいずれかが考えられる。

さらに、土壙の横底が平坦でなく、全体にすり鉢状と思われる所以、その箱をそのまま土壙内に埋納したのではなく、別の場所で箱をこわした後、一括破損品を埋め込んだ様である。

次に炭の問題である。炭は完全に炭化しているにもかかわらず、土壙や壁や底面が焼土化していないことから、これ又、別の場所で雑木が焼かれ炭となったものを破損した箱と一緒に、この土壙に埋め込んだことが考えられる。

寛永通宝6枚は、所謂六道銭とも思われるが、もしうだすると墓としての性格が強くなる。しかし、古銭が出土する遺跡は墓以外にも社寺の境内地、土豪の館跡、城跡などからも出土することが知られている。

であるから、必ずしも墓に限定されず、むしろ第1号土壙で出土した野仏の草立に関連したことかも知れない。

しかし、寛永通宝が出土したことからこの土壙は、寛永通宝の初鋳年1636年以後、江戸末に至るころまでに形成埋納されたことが考えられる。

したがって、土層の切り合い関係から後述する第3号土壙が最も古く、次にさほど時間をおかず、第2号土壙と第1号土壙がほぼ同時期に形成されたことが知られる。

#### 第3号土壙について

第2号土壙より古い段階であることは間違いないが、3号土壙内からも、箱の取付金具が出

土しているので、さほど時間的な隔りはなく、ほぼ同時期と考えても差しつかえないだろう。

#### 第4号土壙について

第3号土壙とほぼ同規模の土壙で、壙内からの出土品はなかった。しかし、これまでの第1号～第3号土壙と近接しているので、同時期のものであろう。

## 6. ま　と　め

本遺跡は、2号壙の溝を充実しようとして偶然に発見されたものである。第1号土壙は、明らかに土葬の形態をなす掘り方であるが人骨や副葬品は無く、内部埋土層中から華立が4個体出土したことから別の目的に転用されたことが考えられる。すなわち、この華立は墓に供献されるものではなく石仏に供献されたものである。そして、4個共に故意に破砕された形跡がある。寄進者である「ムツ」なる人物は現在の土地所有者の家系には全く見当たらない。ただ、資料の乏しい江戸期については可能性がなくもない。

次に2号土壙については、すりばち状で深さもあまりなく土葬用の掘り方とは考え難い。

竹や木の枝のおびただしい数の炭化物や鉄製品が、まとまりを示さず無雜作に土壙内に埋め込まれた感じが強い。これらの鉄製品はもともと長持のような収納箱の金具類と考えられるので、元の箱を別の場所で竹木と共に焼却したあと、現在地に移し埋棄したものと思われる。この時、古鏡が6枚供獻され、付近からはかわらけの類が発見されていることから何らかの祭儀の執り行なわれたことが想定される。

3号、4号土壙も、1、2号とほぼ同時期のものとみなされる。

1号から4号までの土壙や出土品のあり方から全体として何か関連性のあるものとしてとらえるならば、江戸期（寛永通宝初鋳年である西暦1636以後、石仏又はムツなる人物をとりまく状況に重大な変化が生じ、華立や、長持を急ぎ廃棄しなければならなくなつたということではないだろうか。

注1 穴道正年「島根大学敷地裏丘陵の古墳群について」菅田考古第11号 昭和44年3月 島根大学考古学研究会所収

注2 山本清「島根大学敷地裏師山古墳遺物について」島根大学『島根大学論集（人文科学）5号』昭和30年2月所収

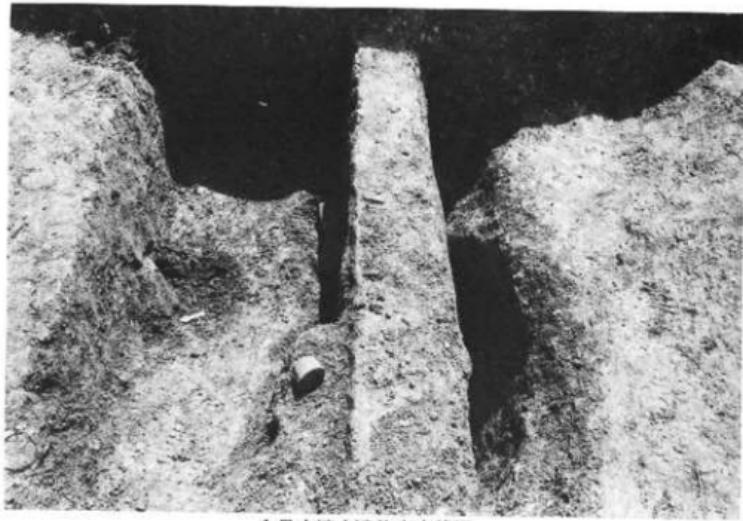
注3 山本清「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」島根大学『山陰文化研究紀要第17号』1977年3月所収

注4 松江市教育委員会「史跡金崎古墳群」昭和53年3月

注5 島根県教育委員会「朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書」昭和54年3月



1号～4号土壤检出状况



1号土壤内遗物出土状况



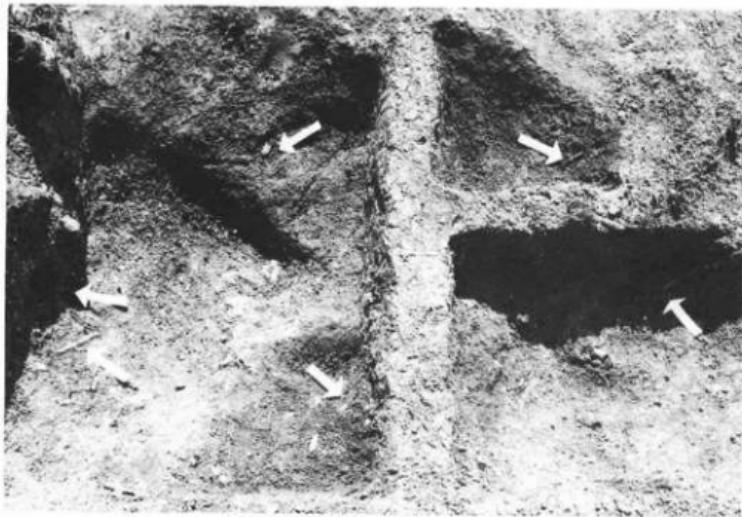
1号土壤內華立出土狀況



1号土壤華立出土狀況



1号土壤全景



2号土壤鉄製品出土状況（上部）



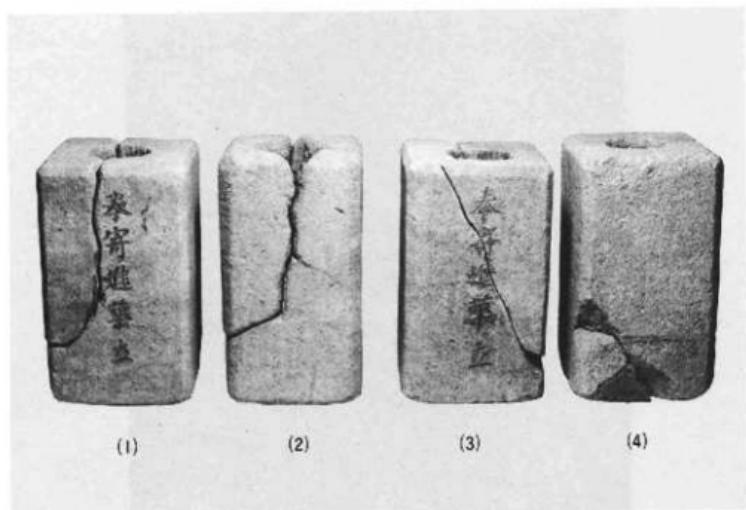
2号土壤内鉄器・木炭出土状況（下部）



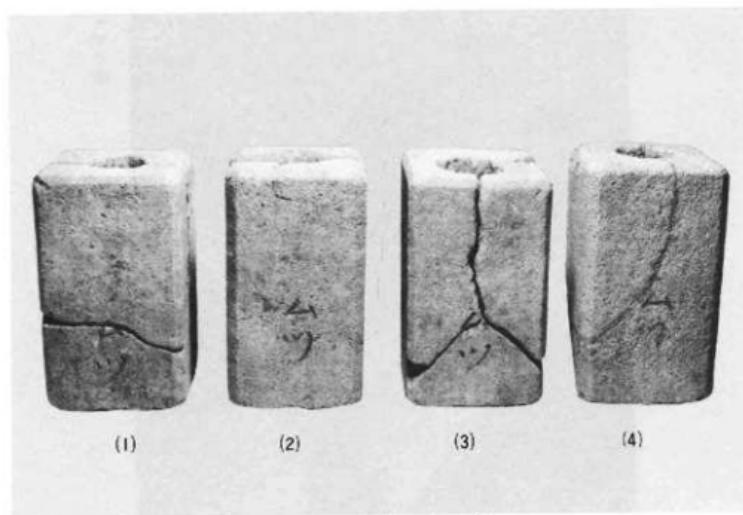
2号土壤内鉄器（A類）出土状況

1号~4号土壤全景



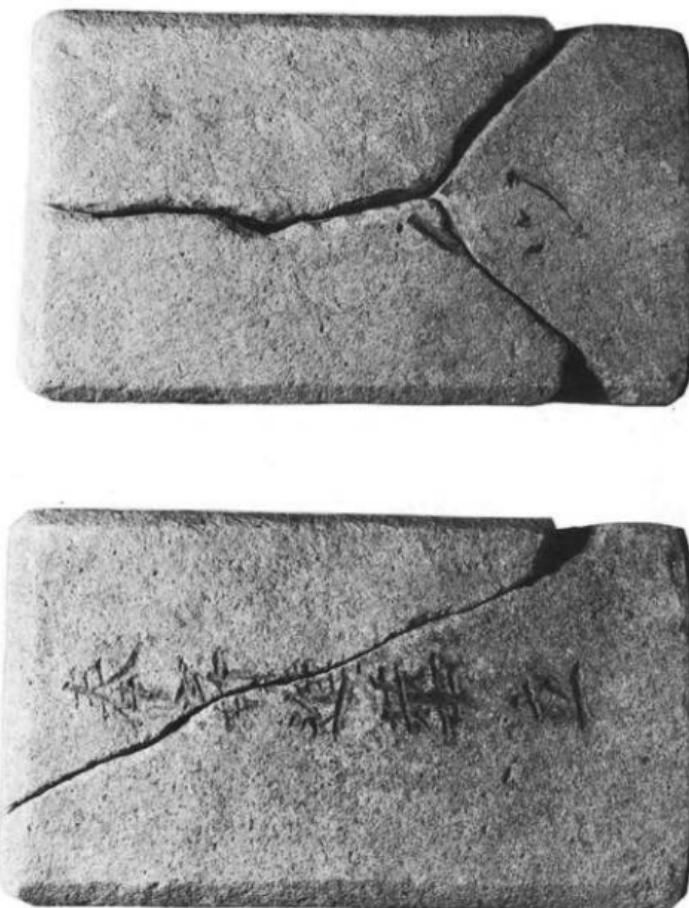


華 立 (正面)

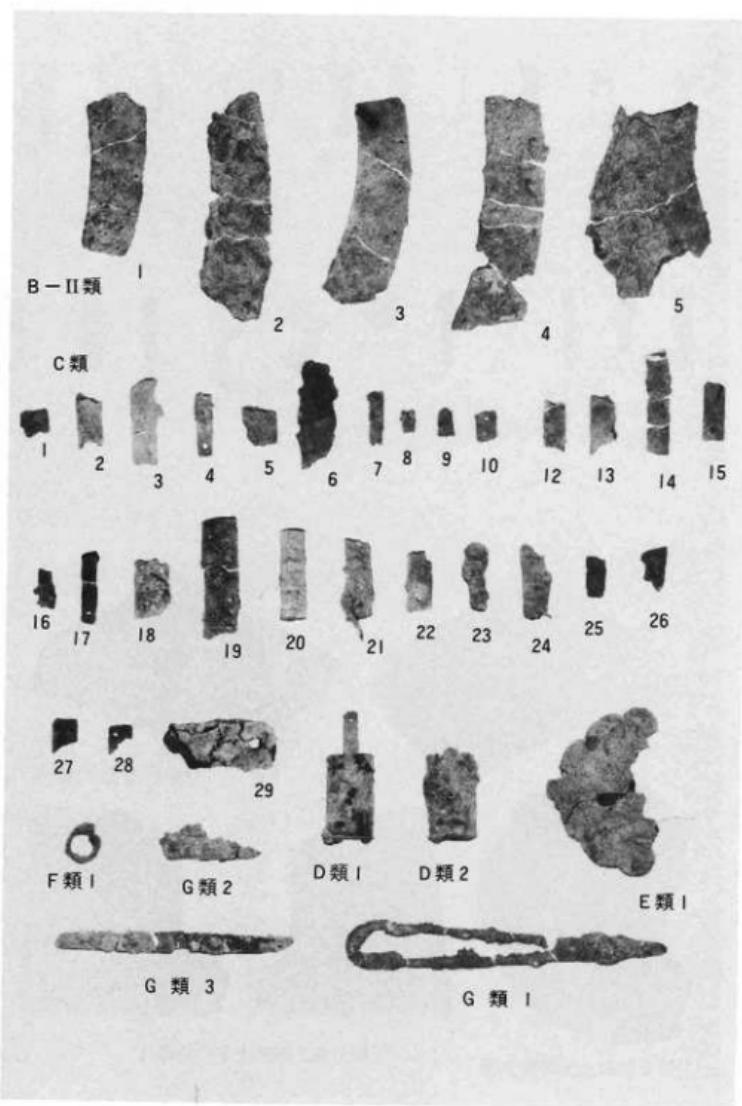


華 立 (側面ムツ銘)

立華号 3









2号墳出土須恵器片



1号土壤出土土師質土器

2号土壤上部出土すり鉢破片